



未来を切り拓く力の育成が、次代の教育へとつながる

東京学芸大学 ICTセンター 教授 森本康彦

平成は、社会の変化とともに、教育も大きく変わった時代でした。相対評価から絶対評価が基本になり、小学校で英語教育が始まりました。授業ではグループワークが日常的になり、タブレット端末が活用されるようになりました。それらは、多くの人がかつて想像していなかったことです。

これからも、社会は変化し続けるでしょう。そうした中で我々教育者にできるのは、目の前の社会の要請に応える特定スキルの指導ではなく、学び方や考え方を子どもたちに授け、主体的に学びに向かう力を育むことです。そうした力を身につけた大人になれば、10年後、20年後にどんな社会になろうと、その時に必要なことを自ら学び、道を切り拓いていけるでしょう。その人たちが、さらに次の時代にふさわしい教育を築き、未来で活躍する子どもたちを育てていく。そうやってバトンは渡されていくのだと思います。

教員の役割も変化し、子どもの学びを導くファシリテーションを求める動きが一層強まるでしょう。例えば、子ども一人ひとりの課題を見だし、目標達成に向けた足場をかけ、それを登れるようにそっと背中を押すといったことです。また、子どもの学習意欲を引き出す鍵といわれてい

るのが、コミュニティーです。友だちが頑張っているから自分も頑張ろうとする意識をつなぎ、クラスや学年を1つのチームとして学びの集団に導くファシリテーションも、これからの教員に求められる役割だといえます。

「生きる力」は四半世紀をかけてようやく定着し、教育観も転換しつつあります。既存の知識を活用して、新しい知識を構築する学びが重視される動きは、今後10年間はもちろん、2030年以降も続くのではないのでしょうか。

そして、評価でも、知識の量でなく学びの質や過程が重視され、ポートフォリオが活用されるようになりました。授業や行事などで、どんな気づきを得て、何を考え、どう行動したか、自分の変化を書き留める。その蓄積によって、自分の成長を実感し、また、自分の学びを振り返ることで、今の自分や未来の自分に必要なことを見だし、自らの学びにつなげていくのです。

教育がよりよく変化しているのは、現場の一人ひとりの先生が学び続け、努力し、工夫されているからです。その学習者としての姿を子どもたちに見せ、学ぶ楽しさ、面白さを伝えていただきたいと思います。



もりもと・やすひこ

三菱電機株式会社に勤務後、27歳で教職に。中学校と高校の教壇に立ちつつ、修士・博士号を修得。2004年に大学教員となり、2017年から現職。専門は、教育工学、情報教育、教育ICT活用、教育AI活用。著書に『教育分野におけるeポートフォリオ(教育工学選書Ⅱ)』(共編著、ミネルヴァ書房)など。

NEXT >>>

東京都世田谷区立桜丘中学校
西郷孝彦 校長